



書

評

谷口 守 著

『入門 都市計画』

中井 検裕*

仕事柄、都市計画の教科書を目にする機会は多いが、本書はこれまでの教科書とは相当異なったものとなっている。一言で言えば、これまでの都市計画の教科書は、都市を操作するための都市計画という技術の「解説」書の性格が強かったのに対して、本書は、都市計画の「考え方」を中心に書かれた教科書だからである。

といって、広範な都市計画体系の一部だけを取り出したものではなく、構成は極めてバランスがいい。全部で12章から構成されており、「はじめに—なぜ都市ができるのか」の集積のメカニズムから始まり、現代都市の課題、都市と都市計画の歴史、計画行為とプランナーの役割、施設配置と土地利用、都市空間の質、都市の持続可能性、都市計画制度、都市のリニューアル、コンパクトシティなどの新しい都市の考え方、参加と合意形成と続き、最後に「これからの都市づくり」で締めくくられている。通読することで、現代の都市計画を理解する上で、最低限の知識が得られることはまちがいない。

自然科学に依拠する確立された工学技術と異なり、都市計画は都市や社会を対象とした技術体系である。だからこそ、その背景や目的といった計画技術のそもそもの考え方を教えることが重要である。しかし、これまでの都市計画の教科書では、必ずしも「考え方」は適切に記述されてこなかったように思う。その理由は、特に現代の都市計画

では、たとえば「東京一極集中の是非」や「コンパクトシティの是非」、「景観コントロールと建築の自由」のように考え方は一意ではなく、一般に教科書に要請される中立的な立場を厳格に守ろうとすると、様々な立場に配慮した両論併記的な書き方にならざるを得なかったからであり、結果として、何を伝えようとしているのかわからないといった状態になりがちだった。

本書はこうした状態に、2つのアプローチによって穴をあけている。1つは著者によるものも含めた最新の学術研究の成果にもとづく論理性であり、スプロールがなぜ好ましくないか、コンパクトシティのメリットは何かなど、わかりやすくかつ説得力のある議論を展開している。もう1つは、おそらくはアカデミック・プランナーとしての著者の長い経験から得られた価値観であり、一例をあげれば、「現在の都市計画は、市（マーケット）に依存しすぎるきらいがあり、むしろ（都市や地域をよくしていこうという「志」にもとづく）「都志計画」としての位置づけが求められる」といった記述は、著者のメッセージの真骨頂ではないかと思う。

文章は平易で記述は極めてわかりやすく、これをそのまま音読すれば、ただちに初学者レベルの大学講義になろう。しかし、本書は初学者のみならず、都市計画の専門家も一読すべきだと思う。そこに込められたメッセージを鏡として、自らの立ち位置を振り返るための良書である。強いて注文をつけるとすれば、それぞれのトピックにおいて、特に初学者がさらに一歩進んだ知識を得ようとする際に推薦できる図書リストがあればと感じた。

森北出版株式会社 TEL 03-3265-8341

2014年10月14日

ISBN978-4-627-45261-9